

令和 2 年度 国際総合科学群
教学 IR 実施報告書

令和2年度 教学 IR 取組事項

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析…………… 1

<取組概要>

平成30年度、令和元年度に引き続き、「新入生アンケート」、「カリキュラム評価アンケート」、「卒業生アンケート」の3つのアンケートに国際総合科学部で特に重視する教育理念に関する共通の設問に対する回答結果について分析した。また、分析結果について、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善検討を支援した。

2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応…………… 5

<取組概要>

令和3年の大学機関別認証評価受審に向け、平成30年度に設定した3つの観点について、解析及び課題解決に向けた検討を進めた。特に令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大前後の影響について分析を実施・意見交換を行った。教学 IR 検討 WG にて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部において各学部独自の課題やオンライン授業等の新型コロナウイルス感染症対応の効果と課題が確認された。

3. ALCS 学修行動比較調査の実施及び分析…………… 7

<取組概要>

学生データの効率的な収集及び他大学との比較のため、令和元年度より教学比較 IR コモンズに入り会いし、令和2年度も1年次、3年次の学生に対しアンケート調査を実施した。令和2年度は令和元年度の調査結果について分析を実施し、今後分析教学比較 IR コモンズ全体の解析結果はコモンズ事務局より提示され、令和2年度に各学部へ内容を報告・共有する。

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

(1) 実施内容

平成 30 年度、令和元年度に引き続き、「新入生アンケート」、「カリキュラム評価アンケート」、「卒業生アンケート」の 3 つのアンケートに、本学で特に重視する教育理念に関する共通の設問に対する回答結果について国際総合科学群の学部（学系）別に分析した。

< 共通で設置した設問 >

「(1) とても身についた」～「(4) ほとんど身につかなかった」の 4 段階で回答

- ・ 自ら課題を見つけ、それを論理的に解決できる能力が身に付きましたか。
- ・ 豊かな教養が身に付きましたか。
- ・ 高い専門的能力が身に付きましたか。
- ・ 国際的視野が身に付きましたか。

(2) 分析結果の報告

解析結果について、各種会議にて報告を行うとともに、結果を各種会議体で報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

○教学 IR 検討 WG（8 月 7 日）

○学長諮問会議（9 月 29 日）

○各学部教授会（9 月開催）

(3) 添付資料

- ・ 分析結果（2～8 ページ）

入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

令和2年度分析結果について

1 趣旨

平成30年度より、国際総合科学群教学IRでは、国際総合科学部で特に重視する教育理念に関して、入学時、卒業時、卒後3年に実施するアンケートに設置された共通設問の回答結果を分析し、経時的な変化を確認する取り組みを開始しました。経時的な分析について、今年度の解析を実施しましたので報告いたします。

2 分析対象データ

- ・ 新入生アンケート
実施期間：令和2年4月
回答数：745名
- ・ カリキュラム評価アンケート
実施期間：令和元年12月～令和2年2月
回答数：636名
- ・ 卒業生アンケート
実施期間：令和元年8月～令和2年3月
回答数：41名（うち、学部卒は30名）

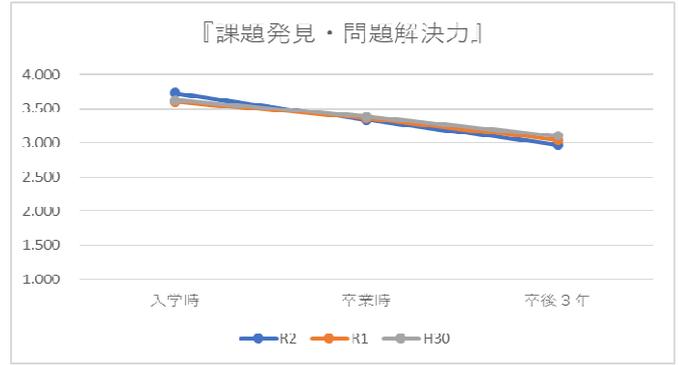
3 分析結果

次ページ参照

各アンケートをつないだ分析 (国際総合科学群)

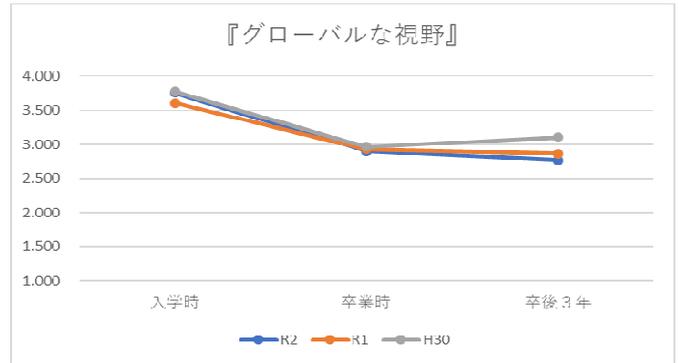
『課題発見・問題解決力』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)
4	569	76.376	274	43.082	7	23.333
3	162	21.745	311	48.899	16	53.333
2	5	0.671	41	6.447	6	20.000
1	3	0.403	10	1.572	1	3.333
回答なし	6	0.805	0	0.000	0	0.000
総計	745		636		30	
平均	3.725		3.335		2.967	
R01年度平均	3.602		3.355		3.041	
H30年度平均	3.627		3.379		3.103	



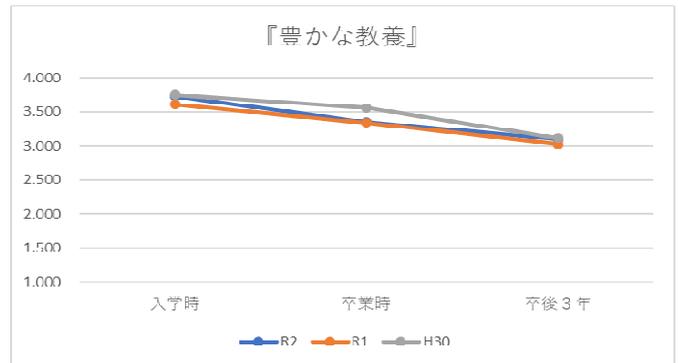
『グローバルな視野』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)
4	595	79.866	200	31.447	5	16.667
3	129	17.315	226	35.535	14	46.667
2	12	1.611	154	24.214	10	33.333
1	3	0.403	56	8.805	1	3.333
回答なし	6	0.805	0	0.000	0	0.000
総計	745		636		30	
平均	3.750		2.896		2.767	
R01年度平均	3.602		2.930		2.865	
H30年度平均	3.774		2.963		3.103	



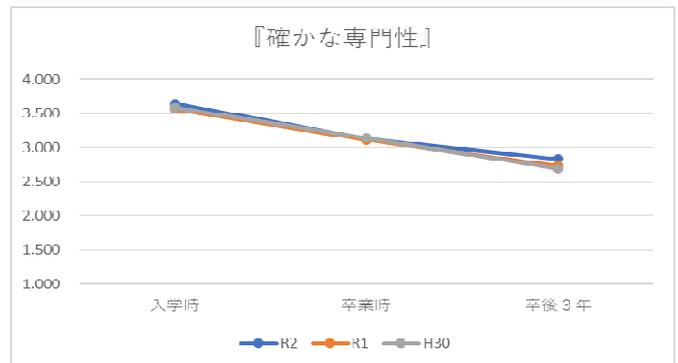
『豊かな教養』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)
4	576	77.315	289	45.440	8	26.667
3	149	20.000	289	45.440	18	60.000
2	10	1.342	49	7.704	3	10.000
1	4	0.537	9	1.415	1	3.333
回答なし	6	0.805	0	0.000	0	0.000
総計	745		636		30	
平均	3.725		3.349		3.100	
R01年度平均	3.608		3.338		3.027	
H30年度平均	3.753		3.556		3.118	

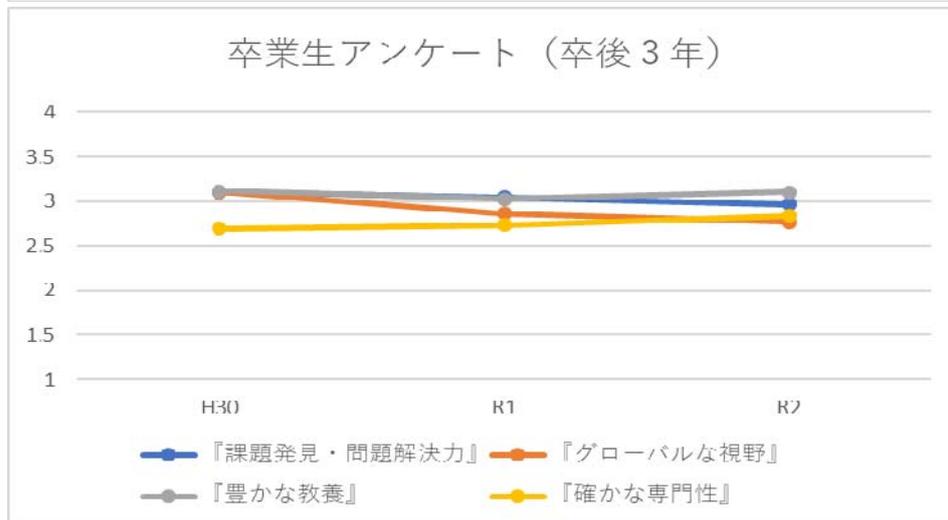
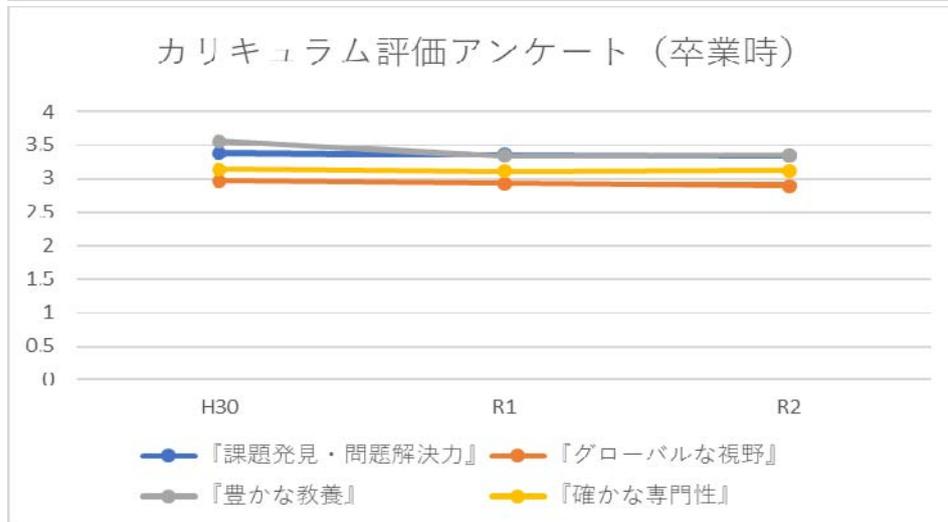
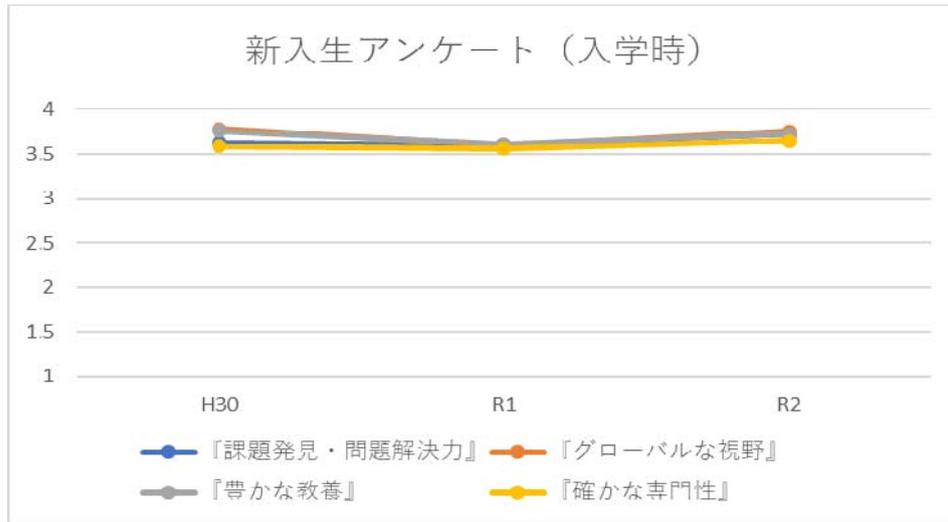


『確かな専門性』

	新入生		カリキュラム		卒業生	
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)
4	510	68.456	204	32.075	5	16.667
3	217	29.128	325	51.101	17	56.667
2	10	1.342	88	13.836	6	20.000
1	3	0.403	19	2.987	2	6.667
回答なし	5	0.671	0	0.000	0	0.000
総計	745		636		30	
平均	3.643		3.123		2.833	
R01年度平均	3.562		3.114		2.730	
H30年度平均	3.586		3.142		2.691	



各アンケートをつないだ分析（国際総合科学群）



2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

(1) 実施内容

令和3年の大学機関別認証評価受審に向け、平成30年度に設定した下記3つの観点について、解析及び課題解決に向けた検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて解析した結果について各学部会議体にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会での報告・共有し、各学部において各学部独自の課題やオンライン授業等新型コロナウイルス感染症対応の効果と課題が確認された。

<教学 IR 検討 WG で取り組む3つの観点>

- ① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- ② 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- ③ 学修成果の可視化

(2) 解析及び検討状況

① 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」

平成30年度から令和2年度の過去3年分の授業評価アンケートのデータを使用し、「授業外学修時間」の推移について分析した。令和元年度までの調査結果と比較し、令和2年度はオンライン授業の導入により、授業外学修時間が増加していることがわかった。WGにおいて、オンライン授業について下記の意見が挙げられた。

- ・ 提出される課題等の質が向上していると感じる
- ・ 講義科目の課題等が増加したことにより、演習科目の授業外学修の時間が少なくなったのではないかと推察される
- ・ 大学設置基準及び本学の規程に定める以上、1単位あたりの学修時間が45時間になるよう引き続き授業外学修時間増加に向けた取組を継続していくべきだと考える。また、45時間を目指すのであれば、これを機にキャップ制の意義について見直し、必要に応じて制度の再検討をすべきだ

② 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」

本学における成績評価の現状把握のため、令和2年度前期の成績データを用い、成績分布の確認を行った。一部学部においては、オンライン授業の影響により GP 平均値が上昇したと思われる学部もあった。

本観点については、今後成績評価のルール策定を目標とし、現状分析及他大学の成績評価実施状況調査を並列に実施し、本学の成績ルールの在り方や、試行実施について検討を進める予定である。

③ 学修成果の可視化

大阪市立大学の開発した「OCU 指標」を参考にした指標を開発するため、令和2年度は専門科目について6項目の学修成果に対する成果配分の検討とレーダーチャートの試作を行った。

(3) WG開催実績

- 第1回 令和2年8月24日
- 第2回 令和2年10月29日
- 第3回 令和2年12月17日
- 第4回 令和3年2月16日
- 第5回 令和3年3月18日

(4) WGメンバー (略)

(5) 添付資料

- ・ 授業外学修時間に関する各学部分析結果 (11～30 ページ)
- ・ 成績分布に関する各学部分析結果 (31～41 ページ)
- ・ YCU 指標レーダーチャート試作結果 (42～58 ページ)

3 ALCS 学修行動比較調査の実施及び分析

(1) 教学比較 IR コモンズについて

教学比較 IR コモンズは、入り会いの各大学における学生の学修行動の比較調査とその分析、そして教学関連の情報を比較閲覧するためのデータベース構築とその提供を行っている組織である。本学でも効率的なデータ集約と他大学比較を目的に令和元年に入会した。

(2) ALCS 学修行動比較調査について

教学比較 IR コモンズに加入する各大学の1及び3学年に対し、共通の設問(80問)について実施する。学生はインターネット上から調査期間中いつでも回答することができるため、授業時間に実施する必要がなく、また、教員が関与することなく調査の実施及び集計が可能であり、調査結果についてコモンズに加入する他大学と比較することが可能である。

令和2年度は令和元年度の調査結果について分析を実施し、これまでに本学で実施している各種アンケートでは確認できなかった観点について、学生の主体的な回答が得られた。

また、令和2年度調査は令和3年1月～2月に実施した。令和2年度集計結果については、令和3年度に集計・報告する。

(3) 添付資料

- ・ 令和元年度横浜市立大学 ALCS 学修行動比較調査回答概要 (60～61 ページ)
- ・ ALCS 学修行動比較調査 2019 結果梗概 (70～71 ページ)

2019 年度 ALCS 学修行動比較調査の実施結果について

1 ALCS 学修行動比較調査 2019 年度調査について

◆ ALCS 学修行動比較調査について

教学比較 IR コモンズ※¹に加入する各大学の1及び3学年に対し、共通の設問(80問)について実施します。学生はインターネット上から調査期間中いつでも回答することができるため、授業時間に実施する必要がなく、教員が関与することなく調査の実施及び集計が可能となります。また、調査結果についてコモンズに加入する他大学と比較することが可能です。

※1 教学比較 IR コモンズ:

入り会いの各大学における学生の学修行動の比較調査とその分析、そして教学関連の情報を比較閲覧するためのデータベース構築とその提供を行う組織

◆ 本学における調査実施体制

・ 対象者

2017年および2019年入学の学部生で在籍している1926名

※ 実際に3年生に進級しているかに関わらず、入学年によって調査対象学年を定義しました。

※ ALCS 学修行動比較調査の集計単位は学部が基本ですが、本学の医学部(医学科・看護学科)はその特殊性に鑑み学科単位で集計することとします。また国際総合科学部については、学系単位で改組後の新学部にあわせて集計します。

・ 調査実施期間

2020/1/14(火)～1/27(月)

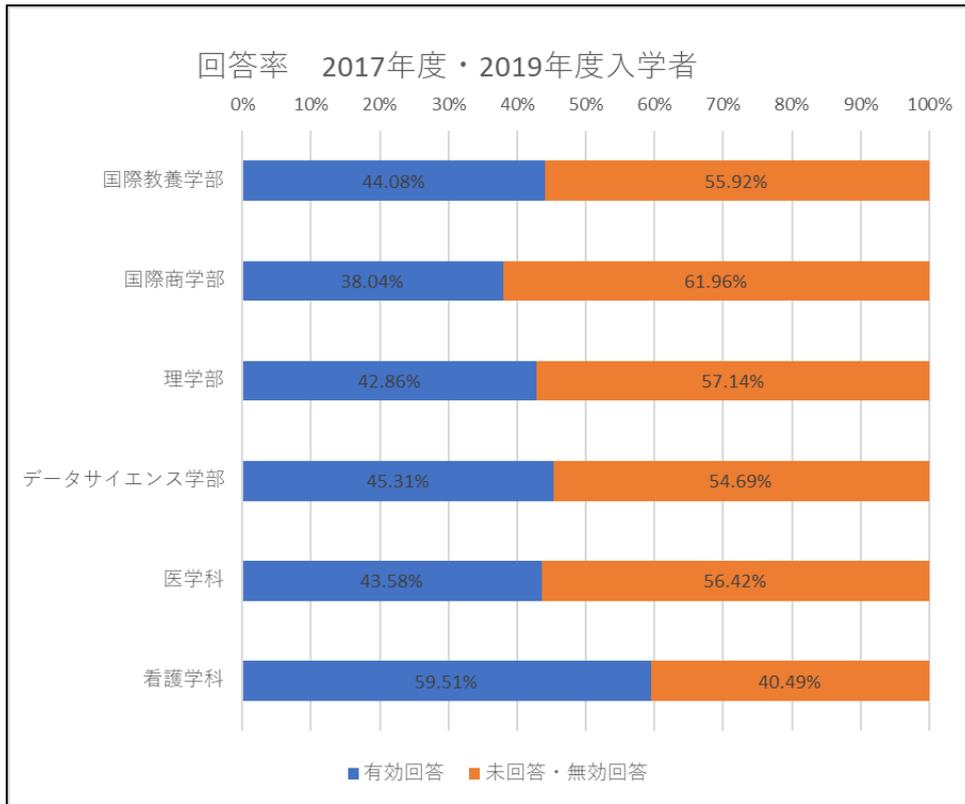
・ 回答率

入学年度		国際教養学部 (教養学系・都 市学系)	国際商学部 (経営科学系)	理学部 (理学系)	データサイ エンス学部	医学部		全学部合 計
						医学科	看護学科	
2017 年度入学者・ 2019 年度入学者	対象者	617 名	560 名	301 名	64 名	179 名	205 名	1926 名
	有効回答	272 名	213 名	129 名	29 名	78 名	122 名	843 名
		44.08%	38.04%	42.86%	45.31%	43.58%	59.51%	43.77%
	未回答・ 無効回答	345 名	347 名	172 名	35 名	101 名	83 名	1083 名
		55.92%	61.96%	57.14%	54.69%	56.42%	40.49%	56.23%
2017 年度入学者 (3 年次相当)	対象者	309 名	279 名	160 名		90 名	101 名	939 名
	有効回答	95 名	83 名	52 名		18 名	55 名	303 名
		30.74%	29.75%	32.50%		20.00%	54.46%	32.27%
	未回答・ 無効回答	214 名	196 名	108 名		72 名	46 名	636 名
		69.26%	70.25%	67.50%		80.00%	45.54%	67.73%
2019 年度入学者 (当時 1 年次生)	対象者	308 名	281 名	141 名	64 名	89 名	104 名	987 名
	有効回答	177 名	130 名	77 名	29 名	60 名	67 名	540 名
		57.47%	46.26%	54.61%	45.31%	67.42%	64.42%	54.71%
	未回答・ 無効回答	131 名	151 名	64 名	35 名	29 名	37 名	447 名
		42.53%	53.74%	45.39%	54.69%	32.58%	35.58%	45.29%

- ・ 本アンケートは 80 設問への回答率が 60%以上等、教学比較 IR コモンズ側の有効回収基準を満たしたものを「有効回答」とします

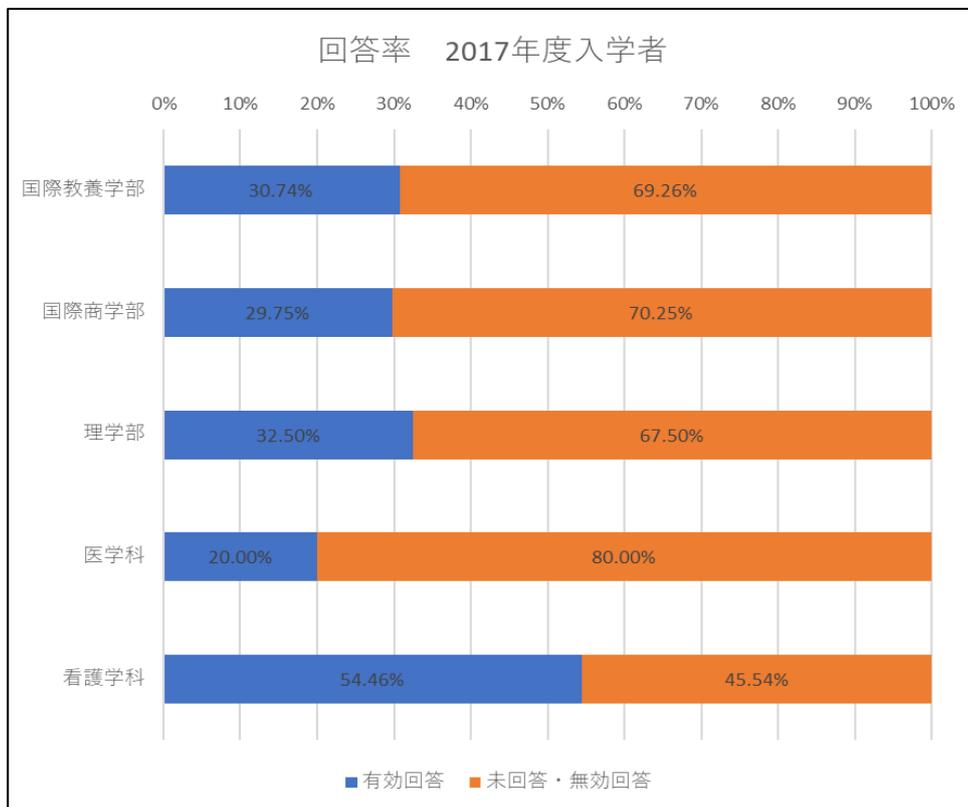
- 2017年度、2019年度

※データサイエンス学部は2019年度データのみ

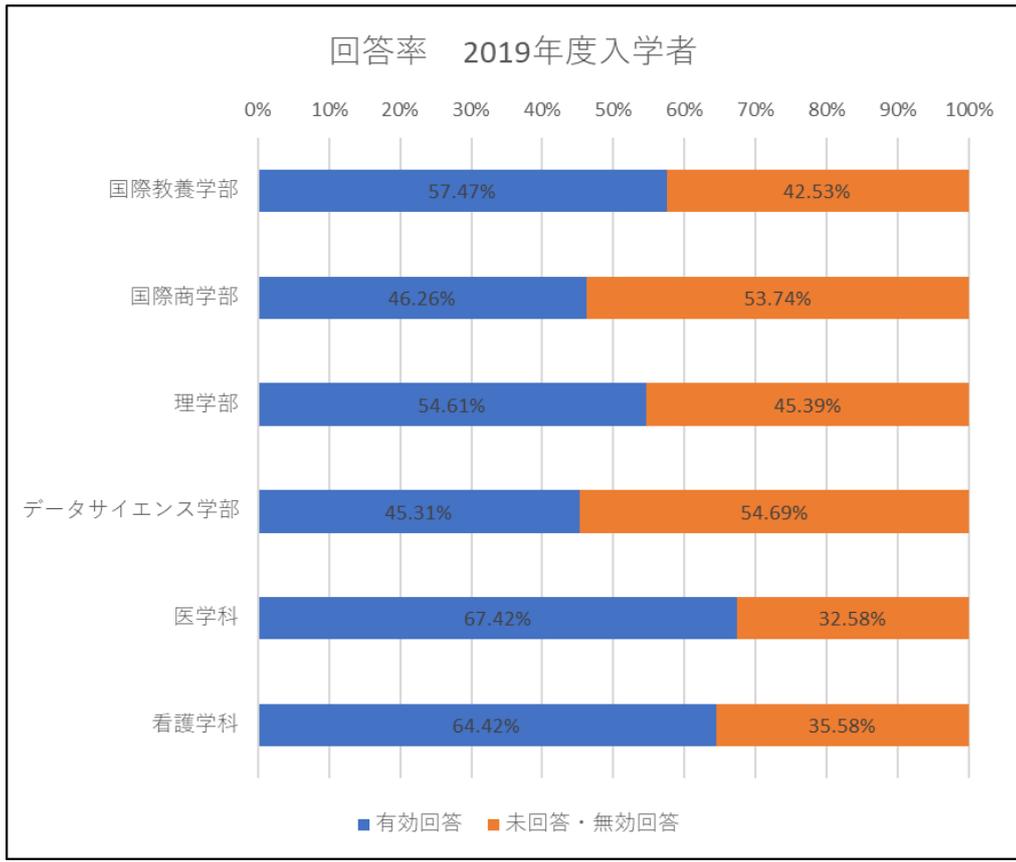


- 2017年度

※データサイエンス学部は設置前であるため対象外



・ 2019年度



大学間の中間活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に適った分析がおこなわれると共に、参加各大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に抛らず、有効回収基準を充たした全学生を総計した結果の一端について公開します。

今回は5年目の調査です。参加大学は22大学、2万人の大学生たちが寄せた回答結果から、またいくつもの発見と確認ができました。なお、その他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

この枠内と右に示した結果は2019年に実施したALCS調査全体のデータ諸元です。

実査期間（全体）2019年7月～20年2月

調査実施方法 ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

調査大学数 22

有効回収数 2009

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成 1年生63% 3年生37% 1、3年生間での比率

性別構成 男性28% 女性72%



この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）大妻女子大学 岡山大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 椋山女子大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス学院大学 宮城大学 横浜市立大学 横浜商科大学

経験 大学の授業や学びに関する経験

以下4つの設問群の箱ひげ図は調査比較対象各大学の1・3年生それぞれの各設問スコアリング・データ*の平均値を用い、それらを1年生の中央値の大なる順に設問ごとに表出した結果です。

加えて、2年間の修学の結果として1-3年生間に明白な差異が認められた設問、すなわち二種の統計検定（U検定とWelch T検定）により両検定結果において相対的に大きな効果量が認められた設問*を緑色の枠で囲みました。また、比較対象になった大学のうち1、3両学年を調査した20大学各学年相互の設問毎190対について二種の統計検定（同上）をおこない同様に半数以上の対で大きな効果量を示し、統計的に有意な差異が認められた（つまり諸大学間での差異が顕著であった）設問は赤枠で示し、その有意差対の比較全組合せに占めた割合を%で記しました。

「経験」群は他の設問群に比してひげや箱の幅が相対的に大きく、学修関連の経験の多寡には大学間差異が比較的大きく、一目でわかります。

箱の幅が大きい項目は大学間の差異が大きいことをあらわす目安です。なかでも赤枠の部分が統計的に有意な差異が確認された設問ですから、これらについてとくに自大学の位置づけを確かめ、その結果に対する解釈と評価、その結果としての対応が求められるところでしょう。

諸大学間差異が目立った「履修したい授業が履修できなかった」は大学の規模に依存する結果ですから容易には対応しがたいところでしょうが、同規模大学との差異は確認したいところです。「学生間のディスカッション」や「課題発表の機会」あるいは「図書館活用」などでのポジションは、学生主体の学修やアクティブ・ラーニングとの関係性において注視すべき箇所です。

対応にあたっては自大学よりも有意に高い評価を得ている大学の施策や実際のありようが第一の探究課題になります。それはこの比較IRコモンズの場合を連携的な内部質保証に活かしていく典型的な方策でもあります。



成長 入学時からの成長感

全体にひげが肯定域にあります。大学によらず平均的には1年次秋において、すでに入学来の成長感が表明されています。1-3年生間では20設問中15問、75%について統計的に意味のある大きな効果量を認め、2年間の修学成果ともいえる成長感が得られていることが確認できました。

多様な大学が加わった調査にもかかわらず、1学年の1項目以外は、大学間差異は顕著には認められませんでした。例外となった1項（「英語以外の外国語の運用力」）は大学によってはそもそもカリキュラム自体に英語以外の外国語授業の設置がなかったり重視していない場合があることから、それがそのまま反映されただけの結果といえるでしょう。

もっとも成長感については大学の教育のみならず、青年期の自然な発達に対する自覚も組み込まれた評価になっていることは勘案すべきところです。

例年のことながら、こうした全体の傾性に反して3年生において成長感に衰退傾向が表明された設問がありました。「英語の運用力」です。この箱ひげについては、右ひげがとりわけ長い点も注目できます。つまり、最大値ないし上位評価において他の大方の大学と異なる大学があるということです。こうした特徴ある大学の秘密に迫ることは他の大学にとって共通の関心事であるといえるでしょう。



*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図、有意差検定についての詳細はコモンズウェブ・サイト <https://cmpir.com>の説明をご覧ください。

時間 日あたり、または週あたり平均値

大学生が学びやアルバイトに費やしている時間数は世間的にも何かと注目されています。そのこともあってか、回答に際しても以前に比べると多少気づかった反応がなされるようになったのかもしれませんが、また、本年度あらたに調査に加わった大学での回答の影響もあったかもしれません。すべての項目、学年においてこれら時間数の調査全大学における平均値が延びました。

授業外の学修時間については、調査以来はじめて両学年ともに日あたり時間換算で多くの大学での授業時間1コマ相当の時間を超えた値が示されました。ALCSでは学びの時間については週あたりと日あたりで直接、時間数を尋ねる設問を設定し、学生にしやすい方で回答を求めています。この方法によって週あたりに学びをしているであろう日数も割り出しています（念を入れて設問でそれに関連した日数を直接記述する質問も設けて検証）。それによるとその平均日数は4.25日（むろん大学によってその値は相違）、したがって週あたりの授業外学修時間数は平均約401分、つまり6.7時間という値がみえてきます。

少し以前、全国的な学生調査などで米国の大学生の授業に関する授業外の学修時間について、日本の学生は1~5時間が大勢を占め、それに対して米国では6~10時間が最も多いといった結果が帯グラフなどと共に示され、「こんなに勉強しない日本の学生」といったマスメディアの喜びそうな言説が流布したことがありました。しかし、それにはそもそもその調査で設定されていた段階評定の区分の仕方の問題もありましたし、それをベースに区間度数を帯グラフなどで並べ比較したり、果ては区間平均をとって日本は3時間に対して米国は8時間などといった誤った判断も誘発しました。しかし、そうした誤りも結果的には災いが福と転じたのかもしれませんが、つまり、それを契機に、大学全般にもっと学んでいる大学生活を当たり前のこととして認めようという雰囲気づくりができたといえそうだからです。実際、本年度の結果をみると、相変わらずバイトに勤しみ、しかし勉強にもそれなりに取り組んでいるという現代大学生の姿があらわれています。

授業外学修時間

1年生 **92**
分 / 日

3年生 **97**
分 / 日

授業に関連しない学習時間

1年生 **45**
分 / 日

3年生 **78**
分 / 日

アルバイトなどの就労時間

1年生 **13 14**
時間 分 / 週

3年生 **14 09**
時間 分 / 週

満足 教学に関わる満足度

「満足」群ではほぼ全項目で各大学の平均値が肯定域に入りました。設問間の相対差異もあまりないことから「総じて満足」という無難な学生生活の日常が映し出されています。この傾向は毎年かわりません。ただし、まさにその「総合的にみた大学での学び」という設問に対する満足度は、とくに約2年半を過ごした3年生からの回答において諸大学間差異が半数以上の比較対で統計的に有意差をもって表出していることもわかりました。絶対的な評定でみれば概ね満足しているが、その満足感には大学間で明白な開きがあるということです。

同様に、いずれも大学で過ごした時間が長い3年生において「学内の雰囲気や居心地、環境」「一般的な教室の設備や使用感」「大学の授業の質」「学費に比した授業内容」に大学間差異が明確にあらわれました。ファシリティについては有意に高評価の大学の実際をうかがうことが、直接的に改善の参考になるはずですが。コストパフォーマンスについては国公立と私学が共に入った調査であることの影響が当然にでていますが、同じ設置者のなかで有意差が認められるとすれば、その原因は探るべきところでしょう。問題は学生からの「授業の質」についての評定で、大学間に格差が見出された点です。この点の確認と検証は見逃すことができません。

例年変わらず「事務スタッフの応対」への回答が、大方の大学で共通し、3年生で顕著に満足感を落しています。初年次での対応が厚いことによる相対差によるものと解釈できるところですが、諸要因考えられ、探るべきところでしょう。



希望 在学中に望むこと

設問「希望」群の最大の特徴はすべての設問において諸大学間での差異が顕著には認められなかったことです。むろん、ここで顕著とは大学間相互の総当たり比較対の半数以上で統計的な有意差が認められた場合のことですから、有意差のなかった大学対がなかったということではありません。個別大学間の差異については公開の範囲を超えるためここでは立ち入りません。

3年生は回答時点での残りの大学生活が1年あまりです。よって入学初年次に比して在学中への望みは全般に低下します。その傾向は設問全般に認められますが、とくに「資格取得」「外国語運用能力」「ボランティア活動」「起業意識形成」「短期留学」といった具体的な実践を伴う学修に対する関心は1年次に比してははっきりと低下することが認められました。

また、例年のことですが、このように多様な大学の総合された回答の絶対的な値をみるかぎり、海外留学や起業意識の涵養、あるいは能動学習の典型ともいえるチーム学習などに対する大方の学生の望みは、大学側（というより実際は大学周辺の思いというべきか）が力を入れようとするほどには強くはないことが鮮明にわかります。むしろ大学の現場は学外のステークホルダーや省内官僚の見識と、この現実の大学生のあいだに立って戸惑っているという構図がこの結果から浮かんできます。実際の学生たちの大勢は、まるで昭和の時代の大学を思わせるような「幅広い知識や教養」あるいは「専門知を十分に学ぶ」ことに、最も強い望みをもって大学生活を送っているようです。

